

大学博物館の初期形態に関する考察

～昭和初期における長岡高等工業学校附属科学工業博物館を例に～

山 本 珠 美

はじめに

I. 昭和初期の旧制大学・旧制専門学校博物館

II. 長岡高等工業学校附属科学工業博物館

おわりに

はじめに

本稿は、大学博物館¹⁾の初期形態について、昭和戦前期の長岡高等工業学校附属科学工業博物館に焦点を当てて論じるものである。

大学博物館は、大学公開講座とともに、大学開放の一形態として戦前から実施されてきた事業だが、その実態については一部を除き²⁾、十分明らかにされているとは言い難い。とりわけ、戦後の教育改革で新制大学の母体となった旧制専門学校については、当該地域と連携した取組が行われていたにもかかわらず、戦後への継承が十分に行われたとは言い難く、帝国大学や有名私立大学ほどには注目されることが少ないことから、大学開放の歴史研究に際し盲点となりがちである。

戦前設置された旧制専門学校の附属博物館としては、東京高等蚕糸学校標本室、長岡高等工業学校附属科学工業博物館、高松高等商業学校附属商業博物館、三重高等農林学校附属農林博物館、等、がある³⁾。このうち、本稿では現存する史料から比較的当時の状況を明らかにすることができる長岡高等工業学校附属科学工業博物館について取り上げ、当時の大学博物館・専門学校博物館の一端を描き出すこととする。このことは、戦前の大学開放の実態を明らかにする一助となるだろう。

I. 昭和初期の旧制大学・旧制専門学校博物館

I-1. 大学博物館・専門学校博物館の設置状況

棚橋源太郎は昭和5（1930）年に『博物館研究』誌上で「学校博物館問題」と題する論考を発表し、「我が国のやうに、一般に博物館施設に乏しい国に在っては、各地大学や専門学校の博物館に期待するところが極めて多い」と述べている。その理由は「大学や専門学校には、科学の研究に必要な器械及び歴史や美術等の研究に必要な標品、標型、絵画、彫塑等の相当豊富なコレクションを有し、且つ屢々欧米諸国へ派遣されて、海外の完備した博物館を見学し、博物館の必要やその重大な職能に就いて、十二分の理解を有ってをらるゝ多数の学者専門家を有し、頗る好都合の事情にあるからである」（棚橋1930b, pp. 9-10）。

では、昭和初期の大学博物館・専門学校博物館の設置状況はどのようなものだったのか。それを明らかにする資料としては、文部省普通学務局編『常置観覧施設一覧』（昭和4年）、その後続としての文部省社会教育局編『教育的観覧施設一覧』（昭和5年～昭和17年）、あるいは日本博物館協会編『全国博物館案内』

(昭和7年)がある。それぞれによって掲載館および館の名称はまちまちであるため、ここでは昭和4年の『常置観覧施設一覧』をもとに一覧表を作成した(表1)。

20館の内訳は、学校種別に見ると大学8館に対し専門学校11館その他1館、館種別では商品陳列館6館、博物館5館、植物園4館、臨海実験所(水族館)3館、標本室2館、となっている。当時の大学・専門学校数を考慮すると、博物館の設置状況がいかに脆弱だったかがわかる。棚橋が「博物館の設備は尚ほ甚だ幼稚で、専門学校や大学にすらもこれを持ってゐるのが極めて少いといふ憐れな状況にある」(棚橋1930a, p. 10)と述べたのも肯ける。

表1. 大学博物館・専門学校博物館(昭和4年)

		名 称
大学	帝国	北海道帝国大学農学部附属博物館
		北海道帝国大学農学部附属植物園
		東北帝国大学附属臨海実験所水族館
		東京帝国大学理学部附属植物園日光分園
		東京帝国大学理学部附属植物園
		東京帝国大学理学部附属臨海実験所
		京都帝国大学瀬戸臨海実験所水槽室
	私立	早稲田大学演劇博物館
専門学校	官立	東京高等蚕糸学校標本室
		横浜高等商業学校商品陳列館
		長岡高等工業学校附属科学工業博物館
		高岡高等商業学校商品陳列室
		三重高等農林学校農業博物館
		彦根高等商業学校商品陳列館
		京都高等蚕業学校標本陳列室
		和歌山高等商業学校商品陳列館
		高松高等商業学校商品陳列館
		長崎高等商業学校商品陳列館
	私立	帝国女子薬学専門学校薬用植物園
他	官立	広島高等師範学校附属教育博物館

[出所：文部省普通学務局編『常置観覧施設一覧』より筆者作成]

I-2. 学校博物館施設奨励建議

昭和6(1931)年、博物館事業促進会は同年6月6-7日に開催された第三回全国博物館会議の討議に基づき、時の文部大臣田中隆三に対して学校博物館施設奨励建議を行った。この建議は理事の棚橋源太郎外7名の会員による提案が賛成多数で認められたものである。そもそも日本の博物館施設の発達が著しく遅れているのは「我が大学専門学校が従来学校博物館の設備を閑却したること」がその主要な原因の一つである。海外諸国の大学等においては、博物館を附設して学生の教育・研究に利用する傍ら一般に公開するものが多く、「北米合衆国の如き約一千の公開博物館中少数の大博物館を除けば、其の半数は大学専門学校附設のものに属す」という状況である。そこで、「全国の大学専門学校をして速かに博物館を附設し、学生の教育上学校としての当然の責務を果さしむると同時に、之を一般に公開して民衆の希望をも充たし、本邦博物館施設の不備を補はしむるやう特に御奨励相成度」との建議を行うこととなったのである。

建議は次のように述べている。

勿論我が国の大学専門学校中にも既に博物館を附設して公開するものなきにあらざるも、斯くの如きは極めて少数例外に属し、大体未着手の状態にありと謂はざるべからず。而して此等大学専門学校中には頗る豊富なる蒐集品を蔵するもの少からざるのみならず、教職員中には之が整理陳列説明等の事に当り得べき数多適任の専門家を有し、又学校によりては教授用器械標本室等の設備に少許の変更を加ふれば、直ちに之を公開し得べき見込あるもの少からざる等、博物館施設に対し頗る便宜の地位にあり。故に今日日本邦に於いて最小の経費を以て最も有効に且つ最も容易に博物館の理想を実現し得べきものを求めれば、第一に大学専門学校を推さるべからず。(圈点は筆者：『博物館研究』第4巻第7号、p. 1)

I-3. 現状および問題点

明治30年代以降、東京帝国大学や東京高等工業学校など、大学・専門学校では所有する学術資料に基づき展覧会を開催するようになった(山本 2011)。大学・専門学校に様々な学術資料が所蔵されていることは周知のことであった。

しかし、例えば東京帝国大学では「各分科に備附けてある標品、模型、絵画、写真、図表の類を取纏めて一緒に陳列し、学生は勿論外部からの参観者などにも自由に見学することの出来る様にする趣旨で」陳列館を建てたにも拘わらず、「然るに目下大学の建築の都合上教室が不足で、それに使はれて居る」(『博物館研究』第1巻第1号、p. 2)という有様であった。同様に、第三回全国博物館会議に出席した東北帝国大学理学部地質学古生物学教室助手の曾根廣は、会議の席上、次のような現状を訴えている。

私の学校の理学部の方では、動植物、地質、鉱物、さう云ふ方面では、以前は小さな標本室を持ってをりまして、自分の学校外の仙台の学生、博物学会の会員、東北地方の修学旅行団体などに公開して出来るだけの犠牲を払い、便宜を計ってをったのでありますが、学校の事業の膨張に伴ひ、標本室が学生の研究室に変わり、或は暗室を取払って講義室の拡張をせねばならぬと云ふやうなことから、標本の陳列場が段々なくなりまして、或る物の如きは屋外にこれを陳列して雨曝しにして置かねばならぬと云ふことになったのであります。それで教室の主任者その他の人達も出来るだけ学校当局にこれをお願いしましたがけれども、それが経費の都合で出来ないものであります。殊に岩石、鉱物教室、動植物教室の如きは標本室を持ってをりません。たゞ物置に標本を蔵って置くと云ふだけに過ぎないのであります。私共の教室もやはりさう云ふ困った状態にありますけれども、何とかして皆様の便宜を図ることにしたいと思つてゐます。幸ひ吾々の方の標本は雨曝しにして置きましても一向差支ないやうなものもありますから、さう云ふものは外に出してゐます。それから地下室の隅に置いても差支ないものはこれを地下室に、また廊下の一部分に置いてもよいやうな物はこれを廊下に置きます。床に置きました物も壁に貼りつけ、天井の裏から廊下の隅までも列べてをります。(第三回全国博物館大会議事録、第一日目午後、『博物館研究』第4巻第7号、p. 10)

ここからは、学術資料を豊富に所有していたとしても、学内における陳列スペースの優先順位は低く、資料の保存状態は芳しくない状況であることが伺える。日本博物館協会編『全国博物館案内』でも、日本の博物館の現状として、「東京・京都・東北及び福岡の各帝国大学には博物、歴史、考古、土俗、人類、医工の各科に涉つて頗る豊富な蒐集品を所蔵してゐるにも拘らず、またこれを収容陳列するための特別の建物がなく、且つこれを学生の研究教育上に利用するの傍ら、一般民衆に公開して展覧させる設備を有してゐない。」「各地の高等商業・高等農林その他の専門学校には、頗る豊富な蒐集品を所蔵してゐるものがなほ甚だ少なくないのにも拘らず、未だこれを公開するの運びに至つてゐない。」(日本博物館協会編 1932、pp. 3-4)と大学・専門学校を批判する一方、その潜在力には期待が寄せられていた。

Ⅱ．長岡高等工業学校附属科学工業博物館

Ⅱ－１．科学工業博物館の成立

I 章で述べた博物館界における議論にも拘わらず、大学・専門学校に博物館が整備されることは極めて少なかった。そのような状況の中、少数の例外として挙げられるのが、長岡高等工業学校（以下、長岡高工）の科学工業博物館である。

明治末期、長岡では市発展のためには工業を盛んにすること、そのために有能な技術者を育成する高等工業学校の設置が強く望まれるようになった。明治40（1907）年2月には長岡商業会議所が「高等工業学校ヲ長岡市ニ設置要望ニ関シ意見開申」を農商務大臣・文部大臣に提出、さらに大正7（1918）年に原敬内閣が「高等諸学校創設及拡張計画」を決定すると、長岡市は高等工業学校設置を新潟県に要望し、県は長岡市の動きを支援して「高等工業学校設立意見書」を内務大臣に提出した。このような長岡市と新潟県の誘致運動が功を奏して、大正12（1923）年12月、長岡高等工業学校が設置され、翌年4月に授業が開始された。設置にあたり、県は敷地18,000坪と金23万7500円、市は県と同額の金23万7500円を寄付している（今泉1972、pp. 401-405）。

こうして開校した長岡高工では、「生徒を教育する外に科学及工業に関する知識の普及に力を尽し地方工業の発達及誘発に貢献する」との趣旨をもって学校附属の博物館設置を立案し、これを長岡市にはかった。長岡市会は大正13（1924）年11月科学工業博物館の建築費の寄贈を決議、同15（1926）年7月建築着手、同年11月落成した。同月に長岡高工開校式と併せて開館式が挙行されている。

科学工業博物館は鉄筋コンクリート造で一部二階建て、総延坪116坪余りである。一階が陳列場で「電灯電力、瓦斯、水道の設備があり理化学、電気工学、機械工学及应用化学の各方面に亘り参考品を陳列し、又各種の実験をすることが出来る」スペースだった。特筆すべきこととして、化学実験のためのドラフトチェンバーの設置や、機械類の据え付けに便利のように床にレールを沈設していたことが挙げられる。二階は応接室および講演室の2室で、小講演会や研究会を開くことができた。さらに、屋上は平坦で、望遠鏡を設備し、天体観測ができるようになっていた（長岡高等工業学校1934、pp. 115-116；作道・江藤編1978、pp. 95-97）。

この科学工業博物館については、校長福田為造⁴¹が開校式の挨拶の中で「全国専門学校中類稀なる博物館が当校に出来たことは当市の誇りであるのみならず本校の誇りとする処」（作道・江藤編1978、p. 93）と述べるほどであったが、当時の大学博物館・専門学校博物館の状況を鑑みれば、発言は過言とはいえないだろう。

Ⅱ－２．館の使命と具体的取組

科学工業博物館は『博物館研究』でもたびたび取り上げられるなど注目を集めていたが、『科学工業博物館要覧』（昭和4年版）によれば、その事業は、①館内陳列、②展覧会開設、③講演会開催、④講習会開催、⑤研究所又は工業相談所を置くこと、であった（長岡高等工業学校1929、pp.14-16）。①の館内陳列は常設展示のことであるが、「高等工業学校の設備を常に公開して一般の縦覧に供することは教授上実行し難い」とした上で、「動かし得るもの毎日教授に使はぬもので一般公衆の興味を惹くものや科学が如何にして工業に応用されるかを示すに適當と認めたものを博物館に陳列し一般に公開する」ものである。②の展覧会は企画展示であり、表2で示したように、化学工業展覧会（昭和3年）、電気展覧会（昭和4年）、機械展覧会（昭和5年）などが毎年4月末から5月にかけて実施されている。秋冬には少年少女製

作品展覧会（昭和5年および7年）や、積雪の多い地域であることからスキーに関する展示（昭和4年および7年）が実施されたこともある（長岡高等工業学校1934、p. 143）。

表2. 長岡高等工業学校附属科学工業博物館の展覧会一覧

開催年月日	展覧会名	陳列品数	参観者数
昭和3年4月20日－5月10日	化学工業展覧会	2,400	23,201
昭和4年1月20日－2月28日	スキー展覧会	220	1,734
昭和4年4月25日－5月10日	電気展覧会	80	26,548
昭和5年4月25日－5月10日	機械展覧会	950	24,115
昭和5年10月10日－17日	少年少女製作品展覧会	977	16,505
昭和6年4月25日－5月4日	理学展覧会	395	14,858
昭和7年1月8日－3月31日	スキーに関する陳列	160	－
昭和7年5月14日－5月22日	化学文化展覧会	1,082	14,866
昭和7年10月15日－17日	第2回少年少女製作品展覧会	666	－
昭和8年4月28日－5月7日	電気展覧会	235	22,916
昭和9年5月6日－15日	発明品展覧会	－	－
昭和10年4月26日－5月5日	水の展覧会	－	－
昭和11年4月25日－5月4日	光の展覧会	－	－

[出所：『長岡高工十年誌』、『長岡高等工業学校一覧』より筆者作成]

さらに、通俗講演や、当業者（工業者）に対して専門的な講演会や短期講習会を開催すること（③および④に該当）、さらには現在の「産学連携」に相当する、各教授が「地方工業に関連した問題に就いて研究して地方当業者と連絡し指導すること」（⑤に該当）も博物館の使命として考えられていた。単に学術資料を公開するということから一歩進んで、地域産業を活性化させる施設という位置づけが伺える。地方都市に地域の期待を担って設置された専門学校の、期待へ応えようという姿勢の現れであろう。

このような科学工業博物館のあり方は、神戸高等商業学校商業研究所（大正8年）や高松高等商業学校商工経済研究室（大正13年）といった、高等商業学校の附属施設のことを思い出させる。例えば、神戸高商商業研究所は神戸市で創業した兼松商店の寄付により設立された組織であり、業務として「講演会講習会其他ノ集会ノ開催」「商業ニ関スル質疑ノ応答」が挙げられていた。科学工業博物館とこれら高商の附属施設との関係は不明であるが、高商、高工に限らず、一般に地方都市に設置された専門学校が「本校の如き専門学校は時々通俗講話会を催し地方事業家の参考に資する必要あり」（『熊本高等工業学校沿革史』の記述）、「一体学校殊に専^{（ママ）}問学校は社会と没交渉であってはならぬ」（広島高等工業学校初代校長川口虎雄の言葉）という、地域社会への使命感（山本 2010）を共有していたことは伺える。

II－3. 地域との連携

同館は上記の事業の一部について地域と連携しながら行っていた。

例えば、昭和3年の化学工業展覧会は、大日本蚕糸大会の開催時期に重なっている。同大会にあわせて市内では各種催しが同時開催されたが、長岡市教育会は市の後援の下に教育展覧会を実施、その第三会場として科学工業博物館があてられたのである（4月21日からの4日間が該当、第一会場は表町小学校、第二会場は互尊文庫、教育展終了後も化学工業展覧会は5月10日まで継続開催；長岡高等工業学校『要覧』1929、p. 12）。閑院宮の台臨や、蚕糸共進会・県土産物展覧会・花卉展覧会・戊申史料展覧会とイベント

が目白押しだったこともあり、地元紙『北越新報』は「山なす好資料、教育展覧会愈よ明日幕ひらき」（昭和4年4月20日、以下日付のみ）、「我等の展覧会（長岡市教育会副会長長谷川政治）」（21日）、「学生団体で賑ふ教育展、逸品揃ひの各館」（21日）、「雨も物かは、教育展大賑ひ、入場口を締切って整理する有様」（23日）、「入場者は概算六万人、表町校が第一、教育展の繁昌振り」（25日）、「好評の高工化工展」（27日）、等々、連日その様子を大々的に報じていた。

また、「毎年6月10日ノ時ノ記念日ニハ長岡市ト共同シテ時ニ関スル宣伝事業ヲナシテ居ル」（『長岡高等工業学校一覧』自昭和5年至昭和6年、p. 134）という取組がある。『北越新報』も、「あす時の記念日、催しの色々」というタイトルで「長岡市役所、高等工業学校、教育会、青年会、時間励行会、朝起会、民心作興会の七団体が記念日に当る明日日行はれることは既報した通であるがその後協議の結果正確なる時報として午前九時、正午、午後九時の三回電気サイレンを使用することに決した。尚ほ午後七時から公会堂に於て開催の筈なる活動写真公開映写会は多数の観覧を歓迎すると。」（昭和3年6月9日）という記事を掲載しており、市や各団体と連携した取組であったことがわかる。

ただし、一般公衆や地方事業家との接続を担ったのは、科学工業博物館にとどまらない。長岡高工では、長岡工業協会、長岡工業相談所、水曜会⁵⁾といった事業が実施され、校長をはじめ同校教職員らが地域産業の発展に協力を惜しまなかった。科学工業博物館の取組は、このような学校全体の方針の上に位置づけられるものであった。

おわりに

棚橋源太郎が戦後語ったところによると、科学工業博物館は「福田校長退任後は長く閉鎖され、廃館同様になっていたので、頗る遺憾としていた」が、「終戦後再び積雪科学館として立派に復活を見たので、中央の博物館関係者では、頗るこれを多とし感謝していたような次第である」（棚橋 1958）という。棚橋が言うように、戦後、科学工業博物館はそのままの形で新制大学へ引き継がれることはなかったものの、積雪科学館という地域の博物館として生まれ変わり、昭和43（1968）年に閉館されるまで活動は続いた。

長岡は豪雪地帯として知られ、積雪が市民の生活を大いに苦しめている土地である。北越製紙（現・北越紀州製紙株式会社、明治40年長岡市で創業）の元社長にして、元長岡市長でもある参議院議員の田村文吉は、積雪の研究とその成果の普及が当該地域の文化・産業の発達、市民生活の向上に不可欠と考え、北越製紙から基本財産として30万円、普通財産として10万円を寄付して、昭和23（1948）年10月に財団法人積雪研究会の設立を決定、理事長に就任した。そして、昭和24（1949）年2月に、長岡工業専門学校（長岡工専、昭和19年に長岡高等工業学校から改称）から旧科学工業博物館の貸与を受けて、積雪科学館が開館したのである。長岡工専が、戦後教育改革によって新潟大学工学部となる3ヶ月前のことであった（長岡市2006、p. 111）。

積雪科学館は新潟大学工学部敷地内にあるものの、組織としては大学とは切り離されたわけだが、田村によると「研究は主として新潟大学の教官に依頼」（田村1956、p. 3）ということで、定期刊行物である『まどのゆき』（43号から『窓の雪』と改称）には、新潟大学教授らによる積雪研究の成果も披露されている。雪上自動車や地下水による融雪促進方法についての研究が進められたという。

このように、長岡市の支援によって設立された長岡高工の科学工業博物館は、戦後、再び長岡市の企業の支援を得、また学校附属でなくなって以降も新潟大学の教員の協力により博物館活動を継続させた。昭和戦前・戦後期における産官学連携の一事例として注目に値する取組であると言えるだろう。

[謝辞]

本稿執筆にあたり、国立国会図書館、新潟県立図書館、新潟県立文書館、長岡市立中央図書館にお世話になりました。この場を借りて、感謝を申し上げます。

[注]

- 1) 本稿タイトルにおける「大学博物館」という言葉の使い方については、説明が必要である。まず「大学」であるが、旧制大学に限らず、戦後の教育改革で新制大学の母体となった高等工業学校や高等商業学校などの旧制専門学校をも含む言葉として使用している。本文中は大学・専門学校と併記するように努めた。一方の「博物館」は、「博物館」と称する組織のみならず、植物園・水族館・標本室・商品陳列館などの公開施設を指す言葉として広義に使っている。
- 2) 例えば、東京帝国大学理学部附属植物園に関する研究（大場秀章「小石川植物園の一般への公開」、大場秀章編『日本植物研究の歴史－小石川植物園三〇〇年の歩み』東京大学出版会、1996年、pp. 133-138）をはじめ、各帝国大学の臨海実験所（西村公宏・飯淵康一・永井康雄「公開施設としての東京帝国大学理科大学附属臨海実験所水族飼養室について」『日本建築学会計画系論文集』第578号、2004年4月、pp. 155-162；同「東北帝国大学理学部附属臨海実験所水族館の公開について」同第587号、2005年1月、pp. 207-214；同「京都帝国大学理学部瀬戸臨海研究所水槽室（水族館）の公開について」同第592号、2005年6月、pp. 225-232；同「北海道帝国大学理学部附属臨海実験所水族室及び標本室の公開について」同第594号、2005年8月、pp. 199-206）、広島高等師範学校附属教育博物館（佐藤優香「広島高等師範学校の教育博物館」『博物館学雑誌』24（2）、1999年、pp. 29-36）、等がある。
- 3) ここで例示した他の博物館について若干の説明をしておく。東京高等蚕糸学校標本室は、明治19（1886）年、その前身である農商務省蚕病試験場の参考品陳列場にはじまる。戦後の昭和27（1952）年、標本室は繊維学部附属繊維博物館となり、博物館法に基づく博物館相当施設に指定された。平成20（2008）年には東京農工大学科学博物館へと名称を変更し全学化され、同大学の農学・工学の研究成果を発信する基地となっている。高松高等商業学校附属商業博物館は昭和3（1928）年設置決定。同校は昭和20（1945）年7月4日未明の高松空襲で焼失し、博物館は廃止、資料も焼失あるいは散逸してしまったものと思われ、戦後への継承はなされていない（山本2008）。三重高等農林学校附属農林博物館は同校開校と同時に竣工した特別展示室が昭和11（1936）年に博物館として整備されたものである。三重大学附属図書館研究開発室のWebサイト「三重大学に博物館があった－農林博物館の誕生と消滅－」（http://www.lib.mie-u.ac.jp/lab/gallery/gallery5/nourin_1.html、2011年3月閲覧）が紹介している。戦後三重大学の博物館として継承されたものの、附属施設としての位置づけはなく、次第に実態を失い昭和40（1965）年に取り壊し、資料は研究室に分散配置されることになった。現在、資料の一部は同大学のレーモンドホールに集積しているというが、保存状態は良好とはいえず、劣化破損しているものや、伝来、内容の明確でないものも多く、これらの調査と保存、活用が課題となっているという。
- 4) 福田為造は長岡高等工業学校の初代校長。校長在職期間は、大正12（1923）年12月～昭和14（1939）年7月。
- 5) 長岡工業協会は大正13（1924）年創立。長岡商業会議所（のち商工会議所）内に事務所を置く「市内唯一の工業界の社交クラブ」であり、会長には福田校長が就任した。長岡工業相談所は長岡工業協会の一事業として昭和7（1932）年に創立、工業に関する各種相談事業に応じた。水曜会は、地元紙等の担当記者と毎週水曜日午前中に博物館で会見し、意見交換、質疑応答を行う会である（長岡高等工業学校1934、pp. 145-146；作道・江藤編1978、pp. 117-118）。

[参考文献]

- 今泉省三『長岡の歴史』第6巻、野島出版、1972年
作道好男・江藤武人編『新潟大学工学部五十年史』財界評論新社、1978年
棚橋源太郎「学校博物館問題」『博物館研究』第3巻第2号、pp. 10-13、1930年（a）

棚橋源太郎「学校博物館問題（承前）」『博物館研究』第3巻第3号、pp. 5-10、1930年（b）

（上記2論文の増補改訂版が、棚橋源太郎『眼に訴へる教育機関』宝文館、1930年（伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第9巻、大空社、1990年）に掲載されている。）

棚橋源太郎「積雪科学館に期待するもの（1）」『まどのゆき』25号、p. 3、1958年

田村文吉「積雪科学館の概要」『まどのゆき』13号、pp. 3-4、1956年

長岡高等工業学校『長岡高等工業学校一覧』（自昭和2年至昭和3年－自昭和17年至昭和18年）1927-1942年

長岡高等工業学校『科学工業博物館要覧』（昭和4年版、昭和5年版）1929-1930年

長岡高等工業学校『長岡高工十年誌』1934年

長岡高等工業学校『発明展覧会記念パンフレット』1935年

長岡市『長岡市政100年のあゆみ』2006年

日本博物館協会編『全国博物館案内』刀江書院、1932年

文部省社会教育局編『教育的観覧施設一覧（昭和5年～昭和17年）』1930-1942年（伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第1巻、大空社、1990年に所収）

文部省普通学務局編『常置観覧施設一覧（昭和4年）』1929年（伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第1巻、大空社、1990年に所収）

山本珠美「地方都市における旧制専門学校の開放事業～高松高等商業学校を例に～」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』2号、pp. 1-24、2008年

山本珠美「明治・大正期の大学拡張（1）～大学公開講座の源流～」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』15号、pp. 9-22、2010年

山本珠美「大学施設の公開に関する歴史的考察～明治後期における大学開放の一側面～」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』4号、2011年（印刷中）

その他、『博物館研究』、『北越新報』、『まどのゆき』・『窓の雪』、各バックナンバー